

高坂家所蔵文書の調査

北 原 真 人

本年一月から三月にかけて旧南向村の古文書調査が数回にわたって行われた。その際、大草の高坂清人氏所蔵文書の中に寛永二十年以前のもの数十点を発見することができた。高坂家文書として従来知られているものは永享四年の中沢左衛門尉の書状と、天正十年の北条氏直書状一通である。今度発見されたものは文禄年間のもの二通、慶長年間三通、元和年間十六通、寛永年間十四通、それに天正十九年の検地帳等七点、その他である。

その大部分は、大草郷に関する村方史料であって、近世初期のものが非常に少い上伊那としてまことに貴重なものといわねばならない。また、延宝二年の写であるが天正十九年の検地帳が発見されたことも太閤検地の性格を知る上に大きなよるこびとしくなくてはならない。この他に、寛永十五年の小作帳、同十六年の御定納帳などがあり何れも得難いものである。

これらの文書の中から興味のあるものを紹介しよう。

言つたいの事

一むかし、宗良親王様、信濃国伊那の太くさの山里にかくれし時、

(先祖)

せんそもしたが、い、よのおとすれ悪きゆへニ大かわらの深山ニ

(河原)

御供いたし、久しく立籠し末に、よろい・旗ともたまわりて、家のたからニ伝ひ、また、後三子孫甲州武田家へしながい申候、

文禄二年五月

香坂右近印

このような文書がある。香坂右近は右近助又右近之助なども書かれ、平沢文書によると宗満(相伝記では宗澄)と名乗り京極高知の家臣となっている(信濃勤王史攻)。どのような意図をもってこのような言伝を書いたものかは明らかでないが、文禄二年は毛利秀頼に

代って京極高知が領有した年であるから、あるいは新しい領主に対して右近が自分の家の家伝を書いて差出したものではなからうか。

香坂高宗が南北朝時代に宗良親王に従って南朝の恢復に尽したことはよく知られるところであるが、香坂右近が高宗の子孫であるかどうかについては研究の余地が残されていた。しかし、この文書の「せんそもしたが、い」云々によって一応その点明らかにされたものといえる。また、高坂家には立派な鎧と旗差物が秘蔵されているが、中でも旗差物は紺色の紺地に金泥で五輪塔が中央に画かれ、それに「万里一条鎧」という墨書があつて(四尺五寸×三尺)一見して由緒あるものと想像される。これについての所伝も明らかでなかったがこの文書によつて宗良親王からの拝領物であることが確かめられるといえる。しかし、何といてもこの所伝の書かれた時期が正平年中からすでに二百数十年も経っているのです、事の信びよう性については一考を要する点がないわけではないが、すでに文禄の頃にこのような所伝があつたという事実はまことに興味あるところといわねばならない。

伊那市円福寺には香坂右近助宛の天正九年の武田氏の宛行状がある。香坂右近助とはどのような人物であるか久しく明らかでなかったが、上掲の文書と、それに年次不明であるが寛永より余り遠くない時期に書かれたと考えられる「御代替申覚書」という文書によつて香坂右近助は武田家へ臣従し代官として治めていたことが知られるのである。右近助はその後毛利・京極氏の時代にも同様に代官となつたことが右の文書によつて明らかである。なお、香坂を高坂と書くことについてはこの頃から混同して行われたようである。

以上、その一端を紹介したのであるが、これらについては更に研究を進めたいと考えている。終りに、史料の調査をこころよく御許し下さった高坂家の方々に心から御礼を申し上げたい。(四・一七)